

## ■ 編集だより

### 編集後記

がんばれ日本の精神医学研究

精神神経学雑誌の編集後記ではあるが、姉妹誌の *Psychiatry and Clinical Neurosciences* (PCN) の Field editor も勤めているので、この雑誌について書いていきたい。本誌にも PCN の目次が掲載されているので、最近は日本人以外の著者による論文が次第に増えていっているのに気づいている読者も多いことであろう。インパクトファクターも 1.5 に近づき、reject しなければならない割合も増えてきた。これが国際化ということであるにちがいない。PCN がますます国際化していくことは、出版母体である日本精神神経学会にとってもよいニュースである。しかし心配なこともある。日本人の投稿論文が減ってきているようにみえるのである。掲載スペースが限られているので、海外の著者の論文が増えれば、相対的にわが国からの論文が減っていくのは当たり前ではある。しかし、本当に相対的な減少なのか。実際にはわが国の精神医学研究の論文数自体が減ってきているのではないかという危機を編集子は持っている。

Index Medicus の会社である Thomson Reuter の調べでは、日本の科学論文出版数は中国、台湾や韓国などのアジア諸国にすでに追いつかれ、逆に中国には追い抜かれているらしい。精神医学分野でも同じことが起きているのではないかと心配になったので、生物学的精神医学の代表的な雑誌である *Biological Psychiatry* 誌で、日本人の著者の論文数の変遷を調べてみた。2004 年くらいから日本人の論文は一年間に 15-20 件くらいであまり変わらない。一方、中国は 2003、4 年はわずかに 1 件であったが、ここ数年は 5 件以上と著明に増加している。台湾も同様である。この雑誌はインパクトファクターが 9 近くもあるので、大学や研究所で長く仕事を続けている研究者でもなければ、この雑誌に受理できそうな論文をそうそう書き上げることはできないかもしれない。しかし、人生のうち、どこかの時点で研究に関わり、何らかの結果を得て論文として発表するという事は、医師が常に自己研鑽が求められる職業である以上必要なことではないだろうか。もちろん極端な業績主義は非難されるべきであるが、英文がしんどいのならば、日本語でもよいであろう。患者の症状を微妙に表現するには、やはり日本語のほうが楽であるし、なによりも読み手とコミュニケーションしやすい。

編集子はアカデミズムの世界にいないのでよく分からないが、新臨床研修制度や専門医制度のために、教える側も教えられる側も、ともに研究したり論文を書いたりする時間がないという話も聞く。とはいえ、日本の精神医学が世界に伍していくためには、質の高い英語論文を数多く発表していくことが大切である。PCN は超一流誌とはいえないかもしれないが、よい英文論文ができたならば PCN へ、もし日本語であれば精神神経誌に積極的に投稿してもらいたい。

仙波純一